

都市政策・地域経済ワークショップ I（第 11 回）講演要旨

【テーマ】札幌国際芸術祭 2024 に向けて—新しい芸術祭と市民との関わり

【講師】漆崇博氏（一般社団法人 AIS プランニング代表理事／札幌国際芸術祭実行委員会事務局マネージャー）

【日時】2023 年 6 月 23 日（金）18：30～21：10

【場所】大阪公立大学 梅田サテライト 101 教室

1. 講演概要

国内の芸術祭、とくに、行政がかかわる都市型芸術祭では市民参加が強調されてきた。なかでも、「札幌国際芸術祭」は、札幌市主催で 2014 年から開催され、芸術祭と市民の関わりを常に問い直し、新たな地平を切り開いてきている。今回は、札幌の現場で、立ち上げ時から芸術祭・アートと市民の関係をコーディネートしてきた漆崇博氏に、札幌国際芸術祭 2024 にむけて、芸術祭、市民参加それぞれの意義にフォーカスをあてながらお話しいただく。

2. 一般社団法人 AIS プランニングについて

AIS プランニングは北海道石狩市にある、社員数 10 人の会社で、5 つの取り組みを行っている。

まず 1 つめが、「アーティストインスクール」である。小学校に芸術家を連れていき、学校という閉じた空間にアーティストという特殊なものを入れることにより いろいろなことが起こり新しい関係性、変化が起こるものである。これに類似する取り組みとしては文化庁のコミュニケーション教育事業などがある。

2 つ目はアートプロジェクトである。イベント含め長期的に芸術文化活動をどう展開していくかを考えている。観音寺でのプロジェクトは瀬戸内国際芸術祭の公式プログラムとなった。

3 つ目はアートスペースの運営である。現在は札幌市資料館（旧札幌控訴院）の中の札幌芸術祭の拠点となる 2 室を運営している。芸術祭に関連する書籍があったり、イベントスペースになっている。

4 つ目はアーティスト・イン・レジデンスである。現在、さっぽろ天神山アートスタジオの運営を担っている。同施設は、札幌芸術祭のレガシーとして誕生した施設で、年間延べ 400 組ぐらいのアーティストが滞在し創作活動を行なっている。うち 1/3 が海外から来ている。

5 つ目はアートフェスティバルである。札幌国際芸術祭、瀬戸内国際芸術祭に参画している。

以上の 5 つのフレームで、企画、構想 コーディネート 管理運営 中間支援 人材育成などのアートマネジメントを行っている。

3. アートとは何か

アートと言っても、アートのイメージは 1 人ひとりでみんな違っている。何でアートなのか、芸術祭でないといけないのか疑問になるのではないかな。ここで一緒に考えてもらいたい。

ではアートとは何か？よくわからない、と言われることが多い。背景が分からない、文脈を知らない、だれが作っているか知らない、何を意味意図しているのか理解できない、どうして作ったのか分からない。そうして自分とは関係ないものになっていく。市民参加とはこういうところと対峙していくこ

とである。

ところで世界で最古の作品は何かというと、洞窟壁画じゃないかと思う。このころは芸術作品として作っているわけではなく、何かを伝えたいと思って作ったものである。

次に、人類が文明を発展させるきっかけとなった存在とは何かというと、神である。これは認知革命により虚構(フィクション)、見えないものを想像する力を持ったことにより生まれた。洞窟壁画も変わっていく。フゴッペ洞窟ではシャーマンが踊っている絵が描かれている。そして、文明と芸術の発展に大きく寄与した存在とは何かというと、宗教・哲学である。これらを伝えていくために芸術は発展していった。例えばキリストの絵はキリスト教徒から見たらすぐに分かるが、そうでない人が見たらわからないかも知れない。これは作品を見たりアートに触れた時に、背景を共有できているかどうかで捉え方が違うということである。では、芸術をささえる新たな存在とは何だろうか。例えば昔の茶碗はひとつで国が買えるぐらいの価値があった。メディチ家の人物の肖像画などがあるように、パトロン・時の権力者が支えた。さらに芸術のあり方は、宗教・政治・権力から生活様式の一部へと変化していく。産業革命以降、絵具とか道具買えない時代から徐々に画材が手に入るようになっていった。そして芸術家が独立していく時代を迎える。芸術家が芸術家として作品を作るテーマとして、いろんな感覚を芸術にしていこうと変化していった。そうすると、1枚の絵をどう理解するかが難しくなってくる。文脈や立場、環境が共有されていないと難しい。評価されているから、価値があるから見てみたいというのでは、絵の価値を受け止められているかどうか疑問である。おなじ文化圏、言語圏でも昔のものは共有できたかもしれないが、徐々にそうでなくなってきた。

そうした中で、1917年ニューヨークで美術界を揺るがす事件が起こる。「アンデパンダン展」でマルセルデュシャンが「泉」というタイトルでトイレの便器を出品し、叩かれた。これをきっかけに美術界が変わっていく。それは結局、よくわからないものを自分なりに考えるしかないということ。わかりにくくしようと思っているわけではなく、これは作品を通して「問い」を投げかけているということである。

つまり、現代社会あるいは未来に対して新たな価値を問うメディア(媒体)が、現代美術(現代アート)、メディアアートである。私がぶれずにやっていこうというのは「問い」をもたらせるアーティストとやっていこうということである。

4. 札幌国際芸術祭と市民参加

札幌国際芸術祭 Sapporo international art festival(SIAF サイアフ)は、ユネスコ創造都市の加盟をきっかけに開始された。特徴としては、3年に1回の開催(トリエンナーレ)、ゲストディレクター制度、「都市」と「自然」をテーマ、現代アートやメディアアートを中心としたコンテンツを複数の会場で展開、札幌市役所が運営事務局、活動・広報拠点を有する、3回目以降冬季の開催、ということがあ

る。都市の特徴をどうつかまえて展開できるか常に考えてやっている。第4回目のディレクターは小川秀明氏。テーマは「LAST SNOW」で、サブテーマは「はじまりの雪」、気候変動で雪が体感できる時期が短くなっている札幌の状況から100年後の未来をみんなで考えようというメッセージである。SIAFにとっての市民参加とは、観る→参加する→つくるのステップに分かれる。

第1回目の開催では、まず全国にあるノウハウをもとに、プレイベントをたくさんやった。社会的イ

ンパクトとして、著名ゲストディレクターによるシンポジウム開催、さらに市民の関心度・認知の向上のためにアート以外の入り口を模索し、参加型プログラムをたくさん実施した。さらにボランティアを招集したところ関心度が高く、1回目は盛り上がったが一方、ボランティアがいないと一部成り立たない運営状況には批判があった。

第2回目の開催では、主体的に活動したいという人をもっと集めようと、最初からボランティアミーティングを始めた。さらに主体的に活動したいボランティアが活動できる場所を、アーティストが作った。一方、あまりにやり方を変えたので純粋に手伝いたい人には合わなかった人もいた。

第3回目は芸術祭そのものを誰のため？何のため？にやっているものか知ってもらおうと、市内10か所でレクチャープログラムを実施した。ボランティアを集める前に、担い手になる人をつめる「SIAF部」を作った。しかし、新型コロナの流行により中止になってしまった。

2024年1月から開催予定の第4回目の芸術祭では、市民参加の入り口を新しく捉え直して、芸術祭を学校に見立てた。SIAFスクールとして芸術祭を舞台にして、市民は学生で学びに来る人と考えて仕掛けを作っている。レクチャー、出前授業、教員向けプログラム、プログラミングの教材、ふむふむプロジェクトなどを展開している。そのほか、開催期間中に体験していくものを計画している。

5. 質疑応答

Q1

イベント開催にあたって、市民を参加側に引き込むことに難しさを感じている。市民もそうだが、市民は鑑賞側にいるものだという固定的な考えで、いろんなところから妨げられることがあるが、札幌では市民を作る側に巻き込むことに対してどのように考えていたのか。

A1

札幌芸術祭では、徐々に参加するフェーズを変えていくということに内部での反対はなかった。そもそも芸術祭の認知度が低く、行政はお金出しているのに、認知度が低いことを危惧している。分かりやすくするという考えもあるが、分かりやすくして観ることに満足、聞くことに満足すると人は動かないと私は考えている。一歩前に踏み出させるためには考える余白をつくる仕掛けが必要である。今回、市民参加の一つとして「教育喫茶」をしている。教育活動を普段からやっている人向けのプログラムだが、答えがあるわけではなく、芸術祭を入り口に一緒に教育を考えないか？という内容である。そうやって受け皿作ると、意外だったが、未来の教育を考えて煮詰まっていた人たちが集まりだしている。一方的に学べる、観れるというのではなく、一緒に考えるということをマイルドに誘えると意外と踏み出してくれるという印象である。

Q2

行政が支援するプロジェクトで行政に対してポジティブなものアンチなものとのバランスが難しいのではないと思うが、どのようにバランスを取っているか？

また、市民参加は時間とお金の余裕がある人になりがちなのではないか、それ以外の人にどうアプローチしているのか？

A2

アートだからといってなんでもありとは思わない。人間は面食らうと守りに入ってしまう。だから関

係性づくりしかない。役所の人は素人だけど勉強熱心で、専門家との情報の溝を埋めようとがんばっている。そうするとアーティストもそういう人を無視しなくなっていく。多少過激なものでも何かしらの仕掛けや見せ方の工夫でバランスをとることができる。どういう話し合いやプロセスを醸成していけるかという問題である。

市民参加は特定の何かを指してはいない。能動的な参加から受動的な参加まで、市民参加はグラデーションである。タイミング、シチュエーションの作り方かと思う。市民参加はボランティア、サポーターの仕組みの参加者数だけではないと考えている。お金ない、時間ない、大人、子供でそれぞれの参加の仕方がある、そういうグラデーションを作っていきたい。

Q3

SIAF スクールでアーティストがグラデーションの下の段階（より受動的な参加）に参加しないのはもったいないのではないか。

A3

会場へ足を運ぶというのはコンテンツをアーティスト本人から聞くことや、事前に作品に触れるという点でアーティストの参加がある。また、アーティストのフジ森氏が制作した雪の結晶が作れるアプリでは、子供向けに講師として参加してもらっている。さらに教職員に使い方を教えオンライン上に置くことで自由に使ってもらえる。アプリで作った結晶は集まる仕組みになっており、会場で雪が降ってくるインスタレーションを実施予定。さらにコミカロイドというだれでも漫画が作れる仕組みも予定しており、アーティストがレクチャーすることになっている。

Q4

SIAF2014 の取り組みとして、「サカナ通信」がよく知られているのでについてのご紹介いただければ。

A4

2014 年の公式の広報が堅い感じで、市民には伝わらないと思ったのをきっかけに、資料館に非公式の SIAF 編集局を作った。ボランティアの口コミで芸術祭情報を勝手に発信したところ、編集局に日々人が集まるようになり勉強会が始まった。さらにゲストにアーティストも呼び、芸術祭が終わった後もアートカフェ資料館と名前をかえて月 1 回続けていった。

そこには坂本龍一さんが噂を聞いてやってきた。これがレガシーとして人のつながりが次の芸術祭につながっていき、現在の教育喫茶、SIAF 部につながっている。

以上